

夏休みの講座、大盛況！

7月も後半を迎えました。暑い日々が続いていますが、もうすぐ夏休みです。夏休みに開かれる文芸館主催の子どものための講座にも、多くの子どもたちから参加の申し込みをいただきました。ありがとうございました。

「夏休み絵本づくり講座」・「10歳からの少年少女俳句入門講座」・「夏休み額縁を作ろう講座」の三つの講座ですが、例年、楽しい雰囲気の中で充実した講座が行われています。今年も夏休みの楽しい思い出の一つにしてもらえたらと思っています。

また、7月15日から「うら打ち入門講座」の募集が始まりました。さらに、7月20日から「大人のための絵本づくり講座」・「文学講座—伊勢物語を読む—(後期)」・「現代詩入門講座」・「文学と歴史講座—藤沢周平の世界—」の募集を始めます。

多くの皆様のご参加をお待ちいたしております。

※ 詳しくは、浜松文芸館(053-471-5211)までお問い合わせください。

文芸館の四季

この時季、文芸館の朝は、蝉の鳴き声から始まります。駐車場に降り注ぐように響くシャンシャンというセミの鳴き声に、本格的な夏の訪れを感じます。

駐車場にある桜の木の幹に、大きな「サルノコシカケ」が見られます。

いつ頃からあるのでしょうか？大きく成長しています。



左の写真は、「シロザクロの実」です。

文芸館の庭にある、「シロザクロ」については以前も紹介しましたが、「志賀直哉邸にあったシロザクロの実を、藤枝静男が持ち帰り、種を蒔いたところ、発芽し成長したもの」という説明が添えられています。

もうすぐ、実がはじけて、真珠のようなシロザクロを見ることができそうです。



次回 企画展

「秋山鐵夫の絵と詩で紡ぐ癒しの空間」

8月2日(土)～11月3日(月)

井上靖と浜松 2

浜松中学校入学、ダブダブの帽子と靴

豊かな伊豆の自然の中で自由奔放に育った靖にとっては、都会暮らしも、父母妹弟と一緒に暮らすのも初めてだった。その上中学受験が重なった。さぞ窮屈で大変な1年有余であったろう。しかし、必死の勉強の甲斐あって、彼は見事浜松中学校に合格することができた。

浜松中学校は明治27年、組合立の静岡県尋常中学校浜松分校として市内元城町に設立された。翌年、静岡県尋常浜松中学校と改称、31年(1898)県立に移管、現在地に新校舎が完成し、翌年4月には浜松中学校と改められた。

前身は明治8年(1875)、小学校教員養成を目的に設立された「瞬養校」である。翌年浜松県が静岡県に合併されると、静岡県師範学校浜松支校、次いで浜松尋常中学校と改名された。14回の卒業生を出したが、19年の一府県一中学制により廃校の憂き目を見た。その後浜名郡町村組合会あげての働き掛けで、27年4月19日、前述したように尋常中学校が浜松に復活したのである。

入学の報を手にして2、3日後、父隼雄は満州(現中国東北部)出動部隊の一員として満州へ向かった。浜松中学校の一年間、靖は父のいない家庭の長男として毎日を送ることになった。

浜松衛戍病院長をしていた父の月給はそんなに悪くはなかったと思われるが、靖を育ててくれた祖母(血はつながっていない)が残したかなりの借財を背負わされていたので、母八重は子供たちにも判るほど生活を切り詰めていた。4月1日の入学式の日、靖は新調の黒の小倉の制服を着、だぶだぶの帽子と靴を履いて登校した。次の文章にこのいきさつが書かれている。

私は母に連れられて、繁華地区にある洋服屋へ制服をあつらえに行った。学校の指定の洋服屋だったが、注文の取り方はひどく大雑把で、身長を計ただけであった。その洋服屋で帽子も売っていたので、帽子も買うことにした。(略)母は育ち盛りだからと言って、指が三本ぐらい余分にはいるひどく大きいのを私の頭の上に載せた。店員がこれではあまり大き過ぎはしないか、せめて指二本ぐらいの余裕のあるのを選ぶべきであると言った。そして指二本でも三年生ぐらいまでは、大丈夫であると付け加えた。母は店員の意見を採用して、指二本はいる帽子を買った。帽子は私の頭の上で、二つの耳を充分にその内部に取り入れて、しかも自由に回転した。その日、私はまた靴を買った。母は靴もまた大きいのを選んだ。大きいのをさえ買っておけば間違いないと言った。

家へ帰ってから、母は新聞紙を折って、帽子の内側に挟み、帽子が私の頭の上で位置を移動しないように工夫してくれた。靴もまた同様だった。靴の場合は新聞紙でなく、綿をまるめたのを爪先の方と踵の方に詰め込んだ。

(「帽子」)

この帽子と靴が、体操教師花井楊五郎の目を引くのである。